

日本人の苦手とするビジネス・スキルに学生が向き合う研究会

—上級国際会計問題討論研究会

高木正史

Masashi TAKAKI



1. 日本人の苦手な英会話にどのようにアプローチするか?

2009年に本学部において設立された上級国際会計問題討論研究会(以下、高木研究会という)は、英会話、国際会計検定(以下、BATIC®という)およびプレゼン技術の向上を目的として、週に一回のペースで活動を行っている。とくに2014年度からは英会話・英語プレゼンに活動の重点を置いている。その理由は、経済のグローバル化の進展とともに、将来、学生が社会に出た後、英語を利用せざるを得ない状況が現在よりも生じてくることが予想されるためである。しかし、英語を話すことについて、殆どの日本人は苦手意識を有しているであろう。まず、これまでの日本人が受けてきた英語教育は、主として語彙力や文法、読解に傾斜しており、会話が重視されているとは言えなかったと考えられる。また、日本は四方を海に囲まれているというその地理的な特徴ゆえ、航空機などで海外に渡らねば、英語を公用語としている国家で英語を話すことは困難である。このような点から高木研究会では、まずは文法のことを可能な限り意識せず、自分の伝えたいことを簡単な英語で話す機会を増大することを目標とした。つまり、英語を声に出すことを第一目標としたわけである。また、英会話・英語プレゼンにおいて取り扱う話題を、自分の趣味や日常生活など、個々の学生が関心を有しているものに限定し、義務的でない、自ら進んで英語を話す訓練を続けている。さらに、相手に効果的に英語を伝達するために、話す内容をホワイトボードに記しながら、聴き手がその英語の意味をビジュアルに理解できるようにしている。その結果、研究会では、英単語・英文で埋め尽くされたホワイトボードをもとに、一時間以上にも及ぶ英語でのプレゼンが会員の学生によって繰り返されるようにまでなった。そして一名が英語でプレゼンを実施し、他の会員や筆者が英語で

質問を行う。むろん、言わんとせんことが英語で出てこない状況もしばしば起こるが、その際は、会員や筆者が互いにフォローし合う。どうしても口から出てこない単語がある場合は日本語を話すことも可能としている。日本語が出たとしてもすぐに英語に言語が切り替わるように英語でのプレゼンを進めていけば構わない。要するに、高木研究会における英会話の本質は、英語を口から出し、相手に自分の言わんとすることを伝えることができているれば良いという考え方に基づくのである。

このような高木研究会における英語学習のスタンスについて、国際経営学部国際経営学科2年の秦野真澄さん(大分東明高等学校卒)は次のように語る。

「当研究会の英会話において最も重要なことは『とにかく話すこと』です。まずは文法を気にせず口から英語を出すのです。私も英文法の基礎知識は習得していますが、昔は『正しい文法で話さなくては』と気にするあまり、全く言葉が出ませんでした。しかし、『文法を気にしなれば良い』、そう言い聞かせると、英単語が口から出るようになったのです。現在は次の段階として、少しずつ文法を意識するようになっています」。

英語は言語であり、コミュニケーションの手段である。それならば、とにかく英語で話す経験を積み重ねることしか英語上達の道はない。むろん、語彙力や文法も必要



秦野真澄さん
(大分東明高等学校卒)

であろうが、語彙力は既に中学校や高等学校で学習しているわけであり、十分といえよう。文法は確かに正しい英語を話すためには必要なものであるが、それを強調し過ぎる必要はないであろう。秦野さんはこれらのことを理解し、相当な時間にわたり英語を話し続けることが可能

なまでになっている。

一方、留学生は英会話に関してどのような考えを持っているのであろうか。中国からの留学生で、高木研究会で活動を行っている国際経営学部国際経営学科3年の楊雯韻さんは次のように語る。

「研究会では、単語と文法に拘らず、とにかく話したいことを話すことを目的としており、その上で英語を使ってプレゼンしています。また、プレゼンはお互い自分の興味があるものを話題としているため楽しく、それと同時に、コミュニケーション能力も高めることが可能なのです。とにかく英語に興味を持つことが第一で、英語を読む・聴くのみならず、話す力も重要なのです」。



中国からの留学生の
楊雯韻さん

楊さんの言葉にもあるように、文法といったものを度外視し、関心のある話題について話すことは英語学習上、必要不可欠なものである。自分の関心のあることは、やはり話をしていて楽しい。楊さんの英語を聴いていると、楽しんで英語を話していることがよく理解できる。そして、楊さんの英語は発音も良く、流暢である。もちろん日本語も堪能である。

英会話を実施している際は、日本人も留学生もなく、お互い英語を用いる。母国語は互いに異なるが、英語という一つの言語でのコミュニケーションが展開されているわけである。

2. 国際会計検定(BATIC®)受験への取り組みとIFRS学習の意義

BATIC®は、東京商工会議所が実施している英語による簿記・会計の知識を判定する試験であり、会計の国際化が進展する中、英語で簿記・会計を理解する能力が求められている現在において、その受験は学生にとって大きな意味を有する。このBATIC®は、2014年度までは「米国において一般に認められた会計原則」（以下、US GAAPという）および国際財務報告基準（以下、IFRSという）に準拠した簿記・会計の処理が出題されていたが、2015年度からは、出題範囲がIFRSからのみへと変更される¹⁾。

BATIC®は、英文簿記に関する Subject 1 と

国際会計理論に関する Subject 2 から構成されている²⁾が、高木研究会では、希望者にこのBATIC®の Subject 1 の受験を勧めている。よって、受験学生は、英語力と簿記・会計の知識向上が期待される。2015年度からの出題範囲のUS GAAPからIFRSへのシフトも、最近ではIFRSのアドプションが各国で進み、また現在日本もIFRSを考慮した会計基準の策定が行われていることから、学生が国際会計を学習するうえでBATIC®は格好の学習機会を提供し得るため、今後の高木研究会会員の当該試験受験に期待したい。

3. プレゼン技術の向上に向けて

高木研究会の活動内容に関連するプレゼン技術は、もはや日本人が社会に出た際に、あらゆる場面においても求められるものとなっている。概して日本人は人前で話をするのが苦手な印象を受ける。プレゼンのスキル向上のためには、やはり練習を重ねることに尽きる。練習を重ね、失敗を恐れないことがそのスキル向上のためにはまず必要であり、その次に、技術的な手法をマスターすることが求められるであろう。これまで、高木研究会会員のプレゼンスキルは、別府大学内のみでの練習・学内での公開プレゼン大会において向上が図られてきたが、今後は学外に向け、研究会会員のプレゼンを発信していく必要がある。また、前述のように、すでに高木研究会内で英語でのプレゼンが実施されつつあるために、今後は英語でのプレゼンにも力を入れ、ある程度のスキル向上が図られた場合には、学内そして学外での英語でのプレゼンを行うことも視野に入れている。

4. なぜ高木研究会を志したのか?

高木研究会は学生にとって確かにメリットも多いが、やはり講義でもゼミでもないために、活動は容易なものではない。それではなぜ学生は高木研究会で精進することを選択するのであろうか。これについて国際経営学部国際経営学科4年の中原裕貴さん（伊万里高等学校卒）は次のように話す。

「現代の社会人に求められているスキルは『会計・IT・英語』（筆者注：中原さんは、この三者を伊藤 [2012] pp.8-10によって知ったとのこと）の三つであるといわれています。そこで

私は、社会に出るにあたってこれらのスキルを身に付ける必要性を感じ、研究会の活動を通して英語と会計のスキル向上を目指しました。研究会ではBATIC®（国際会計検定）という英語と会計のスキルを同時に身に付けられる資格の受験対策を活動の一環として実施しております。私もこの活動を通してBATIC®のBook Keeper Level³⁾を獲得できました。研究会の活動は社会に必要とされるスキルの向上に役立ちます」。

これらのスキルについて、上記括弧内筆者注に示されたテキストの、現在における最新刊として出版されている伊藤 [2014] を見ると、現代においては、上記三つのスキルが必要とされ、(国際) 会計に関する知識格差を意味するアカウント・デバイド (会計デバイド) の欠落が、企業人に必要不可欠なものとして求められるものとされる⁴⁾。



中原裕貴さん
(佐賀県立伊万里高等学校卒)

中原さんは就職活動をアグレッシブに行い、民間企業への内定を獲得しているが、高木研究会での活動が大学生活の充

実のみならず就職活動にも貢献したものと思われる。また、前出の楊さんは次のように述べている。

「大学に入学しても、なかなか英語を話す機会がありませんでした。今までは英語の勉強も、単語と文法が中心でした。人とコミュニケーションを図ろうとしても、話す環境がなく、英語力を鍛える機会がなかなかありませんでした。そこで、英語を扱う研究会はその話す環境を提供してくれました」。

また、前出の秦野さんは次のように述べている。

「『学問に王道無し』とあります。これは何事も基礎が大事であり、習得までに時間と努力が必要という点において全くその通りだと感じます。例えば『国際会計』を学習しようとする、その基礎として英語と簿記・会計を必要とします。さらに、英語の勉強も英単語の暗記から、また簿記・会計の勉強もその基礎の日本商工会議所主催、簿記検定試験3級からステップアップ方式で、学習しなければなりません。つまり何を学習するにも基礎の積み重ねが必須なのです。基礎をないがしろにせず、時間をかけ

て丁寧に学習することをおすすめします」。

英語や会計の知識を習得するためには、日々の地道な努力以外に近道はない。一方、その地道な努力を行うこと自体がきわめて難しい。しかし秦野さんの指摘通り、基礎を重視する学習スタンスは多少遠回りになっても将来的に成果となることは明らかである。

今後も学生とともに、英会話、BATIC®、プレゼンの三つのスキルに正面から向き合っていきたい。

参考文献

- 伊藤邦雄 [2012] 『ゼミナール現代会計入門第9版』、日本経済新聞社。
伊藤邦雄 [2014] 『新・現代会計入門』、日本経済新聞社。
東京商工会議所ウェブ・サイト、「東京商工会議所・検定試験情報、BATIC®」(<http://www.kentei.org/batic/>)。

注)

- 1) 東京商工会議所ウェブ・サイト、「東京商工会議所・検定試験情報、BATIC®」(<http://www.kentei.org/batic/>)を参照。
- 2) 東京商工会議所ウェブ・サイト、「東京商工会議所・検定試験情報、BATIC®」(<http://www.kentei.org/batic/>)を参照。
- 3) BATIC® は、スコアに応じて称号が付与される。すなわち、200-319がブックキーパー・レベル (Bookkeeper Level)、320-699がアカウント・レベル (Accountant Level)、700-879がアカウント・マネジャーレベル (Accounting Manager Level)、880-1,000が、コントローラ・レベル (Controller Level) となる (東京商工会議所ウェブ・サイト、「東京商工会議所・検定試験情報、BATIC®」(<http://www.kentei.org/batic/>)を参照)。
- 4) 伊藤 [2014], 9-11頁。

執筆協力

国際経営学部国際経営学科4年 中原裕貴さん
国際経営学部国際経営学科3年 楊 雯韻さん
国際経営学部国際経営学科2年 秦野真澄さん

研究会会員 (別府大学学生) の募集について
研究会の会員 (別府大学学生のみ) を募集します。まずは見学で、研究会の雰囲気を感じて下さい。国際経営学部以外の学部学生の見学も歓迎します。

お問い合わせ先は、
別府大学国際経営学部高木研究室
(takaki@nm.beppu-u.ac.jp) まで。